UNAHQ-2010

Dimensions

Yuki Arimasa Play Steinway D274 No.427700 Inspired by Bach, Debussy and Beethoven

at Ohga Hall Karuizawa 2016 2 11

UNA MAS
Sawaguchi Ongaku Kobo
HQ 192-24

1.Inspirations:
Bach Cantata BWV 147…11’14”

2.Inspirations:
Bach Partita BWV 826,
Sarabande Part1…2’50”

3.Inspirations:
Bach Partita BWV 826,
Sarabande Part2…2’39”

4.Inspirations:
Bach Partita BWV 826,
Sarabande Part3…2’56”

5.Inspirations: Debussy Homage to Rameau…14’24”

6.Inspirations: Beethoven Piano Sonata No.8 Op13,
Adagio Cantabile…5’07”

7.Green sleeves: England Folksong…6’08”

YUKI ARIMASA

1961年東京生まれ。3歳よりピアノを習い始め、12歳でジャズピアニスト・オスカーピーターソンの演奏を聴きJAZZに魅了され、以降独学で勉強を始める。

1983年玉川大学英文科卒業後渡米、バークリー音楽大学でピアノ、作曲を学ぶ。在学中はピアニストとしてハンクジョーンズ賞、デュークエリントン作曲賞を受賞。1986年に卒業後、バークリー大学ピアノ科助教授として8年間指導にあたり1996年に14年間の在米生活後帰国。

リーダーアルバム、「Tell Me Where The Music Is」を発表。2000年からは洗足学園大学教授としてジャズソルフェージュクラスを開設するなど後進の育成にも注力している。現在は自己のトリオのほか多くのプロジェクトに楽曲、アレンジを提供。

JAZZ CLUB UNAMASでは、レギュラートリオをはじめデュエット、そしてソロピアノなど多彩な表現に取り組んでいる。

2011年に初ソロピアのアルバム「FOREST」をUNAMAS-JAZZよりリリース。また2012年よりTPの原朋直とデュエットプロジェクトを始動し、オリジナル作品集「Vol.One」ついで「The Wine and Roses」を発表。

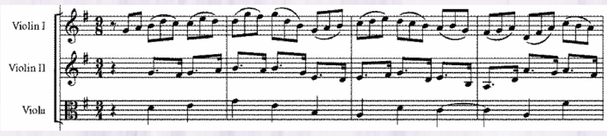
ライナーノーツ：Masaaki Fushiki

記録媒体から楽器そのものを、ここまで彷彿とさせるピアノ録音は聴いたことがない。
響きを通してその肌触りに触れるような感覚は視覚的でさえあると思った。特徴のひとつは音の純度のようなものだが、雑味がなく研ぎ澄まされた音の実在感に一種の衝撃を覚える。特にピアノが減衰していく微弱音のエンヴェロープが限りなく美しい。

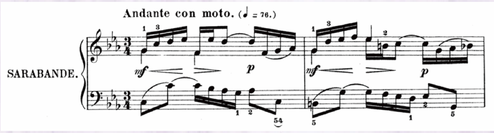
録音に使用されたピアノはスタインウェイ・ハンブルク製の最高峰モデル D274 で、かつてアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリが来日した際に運び込まれ、キャンセル魔の名に恥じぬ彼が最後の公演を待たず帰国してしまい、招聘元が残されたピアノ (S/N #427700) を差し押さえた後に縁あって大賀ホールに寄贈されたという因縁深い楽器である。

今回のレコーディングではピッチはユキ・アリマサ氏の指定によりクラシックに 440Hz でチューニングされている。そして演奏される楽曲はと言えば、バラード的にゆったりと聴ける作品が並ぶ。それぞれクラシックの名曲として知られる旋律をテーマに、即興変奏を展開させる興味深い構成で、ここはユキ・アリマサのジャンルを超えた才能を堪能いただきたい。

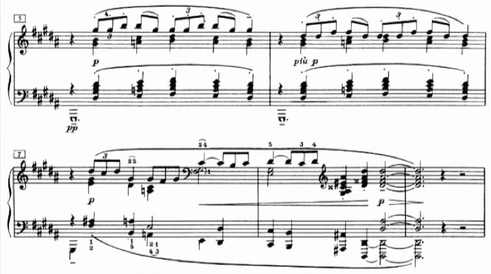
①はバッハの数あるカンタータの中でも有名な第 147 番「心と口と行いと生活で」から、コラール「主よ、人の望みの喜びよ」で合唱と併走する弦合奏のさざ波のような旋律をテーマにしている。



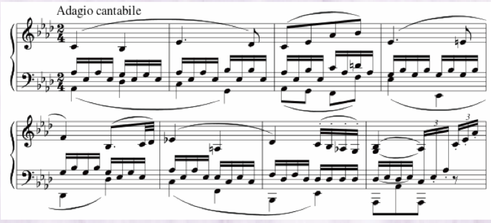
続く②③④の３曲はバッハの鍵盤練習曲集パルティータ全６曲から第２番のサラバンドがテーマとして使われている。パルティータは当時の様々なダンス音楽から着想した 6-7 曲をひとつの組曲としてまとめたもので、バッハのチェンバロ曲としては集大成と目される作品だ。サラバンドはやや重いリズム進行を特長とするもの。この 3 曲を通して最初のテーマに回帰するユキ流パルティータとして聴くのも一興だろう。



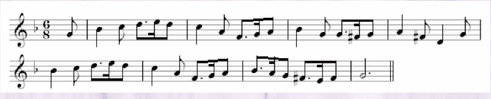
⑤は「ラモー讃歌」。ドビュッシーの作品「映像 1」の３曲の中のひとつで、当時ドビュッシーは古典派の作曲語法やバロック作曲家、特にフランス・バロックの大家ラモーなどを意識するようになり、作品にもプレリュードやサラバンドなどのタイトルを付けている。そして今回のアルバムで最もユキの気合いが入っていると感じられるのがこの曲だ。冒頭はドビュッシーを想起させる分散和音から旋律の断片が少しずつ形を変えてテーマとしての姿を現し、さらにいくつもの展開を見せるこの曲はアルバム構成の中心的存在で、まさにユキからドビュッシーへのオマージュと言えよう。



⑥のテーマはベートーヴェンの最も美しいアダージョと言われる旋律である。ピアノソナタ「悲愴」の第２楽章アダージョ・カンタビーレから穏やかなバラードだ。



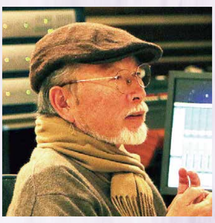
最後に⑦では誰しも口ずさむことができるイングランド民謡「グリーンスリーブス」。
このアルバムのアンコール・ピースのようにテーマの余韻を味わいながら聴き終えたい。



話を冒頭で述べた音の純度に戻すが、これについて沢口氏は恐らく電源による恩恵だろうと語った。軽井沢の大賀ホールでのこの録音セッションの全電源エネルギーは、可搬型バッテリー Power Yiile Plus から供給されており、わざわざこのセッションのために運び込まれたものだ。一般家庭でのピークシフトあるいは停電時非常用電力のための実用製品で、収録作業では 7-8 時間の稼働が賄える。もし再生する側も同様にバッテリー電源で聴けばもっと凄いことになるのかも知れないという期待も膨らむ。併せて特記しておくべきは不要振動対策だろう。ステージ周りのケーブル一本一本に至るまで、徹底的に振動を除去する周到ぶりは今や UNAMAS スタイルとなっている。

この録音を最初に聴いたのは 9ch ミックスだった。そこでの空間認識がまず基準として自分の耳と脳裏にセットされ、次に今回のリリースとなった 5ch ファイナルミックスを自宅で聴いた。両者の違いは、ホール的な響きの支配度が薄れ、極めてシンプルなピアノとの対峙となるのが 5ch 版だ。ハイレゾ・ピュアオーディオの 2ch からいわゆるサラウンドの 5ch へ、さらに高みの 9ch へと再生環境を移行すると、聴き取る音感覚のファクターが音質という地平から確実に変質して行く。僕はそれを『音の佇まい』と形容するのだが、佇まいは直接音と間接音の関係性そのもので、楽器の直接音と同じところから間接音が聞こえても所詮実体感には繋がらない。5ch では間接音の存在が同じ量的バランスであってもベクトル的に遙かに大きな放射空間で発揮できる訳だから、その響きから楽器の佇まいを感じ取っていたとしたら、5ch がシルキーでよりしなやかに聞こえる傾向にあっても不思議はない。本作品の 5ch ミックスでは、わずか数 m 隔てた至近距離にピアノが置かれ、それを目の辺りに聴くというパースペクティヴが再現されており、スタインウェイらしい硬質な高音域の音色に、たっぷりと深い低音域が加わる。その深さは無理なところが微塵もなく楽器そのもののように自然だ。音の一粒一粒が高精細画像をクローズアップするかのような緻密さで現れ、しかもそれがさらに広大なホール空間の出来事であることも微かな反射音の精妙さの中にしっかりと刻み込まれている。

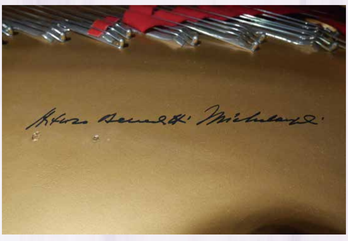
ここで沢口氏の狙いは大賀ホールの響き全体を客席的に俯瞰することよりも、あくまでも楽器と聴き手の位置関係の構築に主眼を置いている。まさに聴き手にとっては至高の鑑賞条件だ。こうした音場の空間認識については、それぞれの再生環境によって濃淡があるので、是非とも 5ch での鑑賞をお勧めするが、この音と響き自体が表現し得る優れた質感という特性は共通のものとして楽しんでいただけると思う。



Mick Sawaguchi
UNAMAS Label

UNAMAS レーベルのピアノソロアルバムは、これまで３作制作し、いずれもスタジオ録音でした。Yuki Arimasa さんの初ソロピアノアルバム「Forest」も音響ハウスでの録音です。

スタジオらしいタイトなピアノ演奏も素晴らしいと感じていますが、最近軽井沢・大賀ホールでクラシックシリーズを録音するようになって、Yuki さんにここで演奏してもらうとどうだろうと考え、Yuki さんへシミュレーションしたピアノソロサンプルを送り「検討してくださいね」と依頼したのが昨年の春でした。



もし実現すれば、ご本人もホールでのピアノソロ録音は初めてですし、UNAMAS レーベルの私も初めてのホールピアノ録音となります。「やってみましょう」ということになり、レーベルの３つの基本コンセプトを以下のように検討しました。

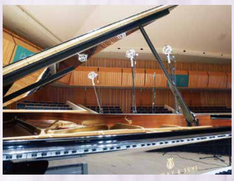
1. ART : 大賀ホールのSternway Hamburg のピアノと共鳴するすばらしい響きを活かすためにJazzでありながら、クラシックの要素も取り入れたオリジナルな演奏で構成。

そのために取り上げた主旋律は、Bach ,Debussy、Beethoven などになりました。これらのテーマを借りて、そのあとは自由なインプロビゼーションで進行するという Jazz 演奏と同じ手法です。スコアもありませんしリハーサルもない、まさにその場でしか実現しないテンションと大賀ホールの美しい空間再現を捉えることにしました。

2. Technology : 前作「Death and Maiden」で導入しました、オールバッテリードライブ駆動とEMC ノイズ対策は本作でも継続しています。

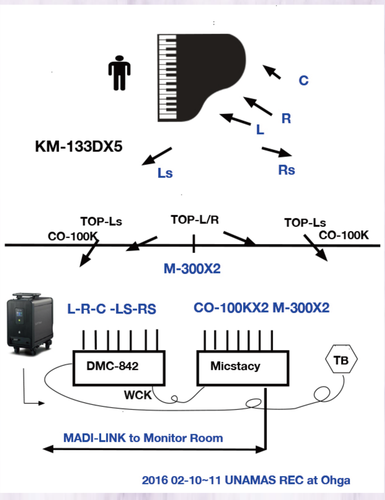
今回は、ピアノソロということもあり基本点を重視しました。すなわちステージでのピアノ周りの不要共振を排除するという対策です。これには毎回マイクケーブルで活躍しています AccousticRevibe の石黒さん自らが様々なチューニングキットを用意していただきました。

マイクスタンドの３点指示部やマイクハンガーなどの共振排除グッズ、そして音響ハウスでのピアノ録音でも採用しているピアノ下部の音の拡散パネルといったアコースティックな処理を加えています。



3. Engineering : 本作もImmersive surround 9ch 録音を行いました。
前作「Death and Maiden」でトライしたハイトCH 用マイキングをさらに改良し、写真でもお分かりのようなステージ面位置への平行４CH マイキングとしています。

今回は Top-CH のL/R はカーディオイドペアにTop Ls/Rs はオムニの指向性としてフロントに位置するメインのピアノサウンドをフロントでは明瞭にして、リアにやや豊かさを持つようなイメージで配置しています。



UNAHQ-2010

Rec. Date 2016 11/Feb at Ohga Hall Karuizawa Nagano JAPAN
Piano Tuner: Kiichi Miyazawa (H.MATSUO MUSICAL INSTRUMENTS CO.LTD)
Apf Model: Steinway Hamburg D274 NO427700

Producer: Mick Sawaguchi (Mick Sound Lab UNAMAS Label)
Venue Organizer: Seiji Murai (Synthax JAPAN Inc)
Rec/Mix/Mastering: Mick Sawaguchi (Mick Sound Lab)

MADI Rec by DMC842/Micstasy/MADI face XT (Synthax Japan Inc)
Digital Mic KM-133D as MainMic (Sennheiser JAPAN K.K)
Mic Cable /tuning kits: AccousticRevive (Sekiguchi Machine CO.LTD)
Peripheral Facility by Kiyotaka Miyashita (JINON)
Battery Power Supply by PowerYIILE PLUS (ELIIYPower co.ltd)
DAW: Pyramix V-10 192-24 Rec-Master (DSP-JAPAN LTD)

Album cover Illustration by Alessandramart
Album back photo by 7 maru
Photo: Alan Narez/Mick Sawaguchi
J.K Design : IV-Planning Inc.

Produced by
沢口音楽工房 Mick Sawaguchi

〒180-0012 東京都武蔵野市緑町 1-2-13 TEL:0422-53-8021
URL:http://unamas-label-jp.net / E-mail:mick-sawa@jcom.zaq.ne.jp

個人的に使用する場合を除き、著作者の許可なくCDやその他記録メディアへのコピー、ネットワーク配信サイト、ネットラジオ等への配布は法律により禁じられています。
Unauthorized any duplication or delivering is a violation of applicable laws.